



己の限界への挑戦 —極真空手初段への道—

大内 仁守

平成3年卒



1966年（昭和41年）生まれ 静岡県富士市出身 56歳 / 在学中はスーパータイガージムに所属し、佐山 聡に師事。総合格闘技シューティング（現 修斗）を修める / 1991年卒（朋友会） / 1994年 矯正歯科研修課程修了 / 1999年 日本矯正歯科学会認定医 / 2000年 西東京市 おおうち矯正歯科小児歯科クリニック開設 / 2011年 日本矯正歯科学会専門医 / 2021年 日本矯正歯科学会臨床指導医 / 2023年 プレオロソ公認講師

大学を卒業し開業して数年が経ち、40才を超えた頃、近くの極真空手道場の門を叩いた。もともと、武道、格闘技が好きで、学生の頃は総合格闘技のジムに通っていたのであまり敷居は高く感じなかった。しかしながら史上最強の男になりたいとか、世界王者を目指すなどというような気概は微塵もなく、ただ老化防止と健康増進が目的であった。仕事に穴を空けないよう、週に1日、休診日に通うことにし、細くとも長く続けようと思った。ただ、極真空手といえば武闘空手として知られているので、怪我だけはしないように心がけることにした。

共に汗を流す同門の方達は、学生、会社員から企業経営者、警察官、大学教授、吉本の芸人まで様々である。そういった先輩、後輩達と切磋琢磨しながら昇級を目指すところに稽古の醍醐味がある。小生は亀の歩みで色帯最上級の1級茶帯になるまで10年を要した。

しかしここから初段までが一番険しく、多くの1級の門下生が、次は自分が黒帯審査に推挙される番かと、手ぐすね引いて待っている。だが、実際に受審できるのは年に1人か2人である。実は小生は黒帯にはなれないだろうと思っていた。その理由は大学時代に空手部の友人から、「空手の流派はたくさんあるが、一番厳しい流派が極真だ。他流派は3年程度で昇段できるが、極真は10年以上かかる。黒帯になれるのは、ほんの一握りだ。昇段するためには、まず自分の身長分の垂直飛びと立ち幅跳びができ、ベンチプレスで自分

の体重の重さを自分の年齢の回数分挙げられるようにならないといけない。体力面だけでなく、素行や品性も問われる。休みの日には早起きして町のゴミ拾い、近所の公園のトイレ掃除を行い、バスや電車では座らずに、席を譲らなければならない。」など、黒帯になるための条件を切々と聞かされていたためである。もちろん現実にはそのような決まりはなかったのだが、鵜呑みにしていた小生は初段になるのはとても無理だと思った。不甲斐ない話だが、黒帯を目指すというよりは空手の技術を体得できればいい、せめて帯に色がつけば本望だと思っていた。そんな中、一昨年の秋にようやく、受審者名簿に小生の名前が載った。14年が経っていた。

型審査





組手審査

試験会場には、小生と同じく審査を受ける同門の他、道場関係者、見学の方々など含め約200名ほどが集結していた。筆記試験から始まり、基本稽古、移動稽古審査へと続く。型審査では約70におよぶと言われる基本型の中から、その場で4つの型を言い渡され、規定の所作を行う。集中力と正確性が求められ、間違いがないか、一つ一つの動作にキレがあるかを審査される。小生は自分で分かっているだけで2カ所ミスをし、次の組手審査の先行きを暗示する結果となった。

型審査が終わるといよいよ組手だ。昇段審査のハイライトである。勝敗を決することより、技能、体力共に初段を名乗るに足る水準に達しているかを重視される。極真は直接打撃制なので、一撃必殺のノックアウトを狙って、本気で攻めてくる。アラ還の小生にとっては恐怖でしかない。初戦の相手は身長180cmを超える巨漢で二段の実力者であった。近づけば膝蹴りが、離れれば回し蹴りが飛んでくる。身長差があるためこちらの突きや蹴りは簡単には届か

ない。その上、身体が鋼の鎧のようである。一步踏み込んで、まな板みたいな腹筋にいくら中段を叩き込んでもビクともしない。思い切って飛び膝蹴りを見舞おうと思ったが今まで一度も

やったことがない。どこをどう攻めたらいいのか、考えている間にも上から突き、肘、膝、蹴りが雨の如く降ってくる。このままここで倒れたら、明日の仕事はどうなるのか、初診相談の患者が午後からくる、セファロ分析も溜まっている、などと余計なことを考えていたら、いきなり右の側頭部に上段回し蹴りを喰らった。一瞬、相手が10人くらいに見え、耳の奥の方でグワンと音が聞こえた。こいつはたまらんとした。もう一度これをもったら、間違いなく病院送りにされる。相手の間合いに入らない

ように、うまく攻撃をかわし、バックステップで蹴りを回避する戦法に変えた。こう書くと立派な戦術に聞こえるかもしれないが、要するに防戦一方ということである。試合時間も相手のスタミナもまだまだたっぷり残っている。無いのは小生の体力だけだ。どうにもならない状況の中で、昔読んだアントニオ猪木の本を思い出した。「とてつもなく強い敵と戦う時、なにくそ、やるだけやってみると開き直ることができるのは、私の精神力の逞しさだと思っている。」という一節である。こうなったら猪木のいう通り、死ぬか生きるか、やるだけやってみようと思った。試合のほんの数分が何時間にも感じた。稽古で培った自分のいつもの技が出せないまま、終了時間になった。

昇段審査は連続組手で行われる。休む間も無く次の闘いが始まる。次戦の相手はこれまた、私より背が大きく、ふた回りほど若い選手だった。こちらはヘトヘトなのに、相手は体力も気力も充分だ。猪みたいに前に突進してく



